

Title	Juḥāの笑話について
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学学報. 72(3) p.29-p.46
Issue Date	1986-11-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81127
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Juhā の笑話について

竹 田 新

On the Anecdotes of Juha

Shin TAKEDA

Juha, known as the principal character of comic stories in the Arab world, has been sometimes confused or mixed up with Nasreddin Hoca, the thirteenth century hero of the Turkish anecdotes. Considered to have been the man named Abu 'l-Ghusn, who lived in the first half of the eighth century, Juha actually antedates Hoca in his appearance in Arabic literary works.

Juha's anecdotes in the Arabic works before the thirteenth century may be classified into three groups : (I) the stories of a stupid man, (II) the stories of a clever man, and (III) the stories of a man pretending stupidity. Most of the anecdotes belong to group (I), in which Juha is characteristically made a fool of by the common people, and some of these share themes with similar stories found in Japan and other non-Arab countries. In the stories of groups (II) and (III), though small in number, Juha is depicted as a court jester, always impressing the men in power with his wit and intellect. Furthermore we also find Juha playing the role of a *cadi* or parasite in "Juha's stories" in the same period, but they are obviously based on characters other than Juha himself.

In this way, Juha, involving as he does quite a few characters, acts the so-called "trickster" or "fool", and has become the panacea for the Arab people whenever they are depressed or mentally exhausted.

(I)

アラブ人, 中でもエジプト人は小話・ジョークが大好きであるが, その主人公として Juhā (一般に Joha, エジプトでは Goḥa) が頻繁に登場する。ところが, 現在, 活字となって広まっている Juhā の笑話の多くは, トルコ起源の Nasreddin Hoca と結びついた, いわゆる Nasreddin 物語のアラビ

ア語訳である。¹⁾

そこで、本稿では13世紀と言われる Nasreddin の登場以前のアラビア語文献により、本来の Juḥa の笑話とはいかなるものなのかを主に探してみたい。

(Ⅱ)

預言者 Muḥammad (632年没) は諧謔を好み、ある老女に「天国には年老いた女人は入れない。」と言ひ、彼女が泣くと、彼は笑って、「『我らはこの乙女たちを造り、処女にしておいた。かわいい、同じ年頃の。』(即ち、天国では老女は存在しない) という神の御言葉²⁾を聞いたことがないのか。」と言ったという話などが伝えられている³⁾が、アラブ人が古来、笑いの才に溢れ、諧謔を愛していたことは、現存する数多くのアラビア語文献の中から、はっきりと読み取れる。

神学者や神秘主義者の中には、いかなる笑いも品位がないと、極端な場合は罪深いものと見做す者もいるようだが、少なくともイスラーム暦1～4世紀(7～10世紀)には、こうした意見は人々に殆ど受け入れられなかった。⁴⁾

アラビア語文献の中でも、特に adab (教養文学) 関係の書物は多数の nawādir (小話、文字通り「奇談」)・fukāhāt (笑話) を含み、これらなしには adab 書自体が成り立たないと言ひ得る。例えば、al-Jāhiz (869年没) の K. al-Bayān wa-t-Tabyīn 「説明と証明」や K. al-Bukhalā' 「けちんぼども」、Ibn Qutayba (889年没) の K. 'Uyūn al-Akhbār 「話の泉」、al-Bayhaqī (932年以後没) の K. al-Maḥāsin wa-l-Masāwī 「美と醜」、Ibn 'Abd Rabbih (940年没) の K. al-'Iqd al-Farīd 「無類の首飾り」、Abu'l-Faraj al-Iṣfahānī (967年没) の K. al-Aghānī 「歌の書」といった著名な adab 書も、多数の笑話・小話を取り入れている。

そして、Ibn an-Nadīm (995年没) の K. al-Fihrist 「目録書」によると、イスラーム暦4世紀には、al-Ghādirī (8世紀活躍)、Abu's-Sa'ib al-Makhzūmī (8世紀活躍)、Hibbat Allāh (888年没) など19人の baṭṭāl (おどけ者) の各々に関する書や、Juḥa, Ibn al-Mawṣilī (850年没) など9人(うち2人は、おどけ者と重複)の mughaffal (間抜け) の各々の小話集が世に出ていたようだ。⁵⁾

以後も、at-Tanūkhī (994年没) の K. al-Faraj ba'da 'sh-Shidda 「苦しみの後の喜び」と K. Jāmi' at-Tawārikh 「歴史集成」、al-Huṣrī (1022年没) の K. Jam' al-Jawāhir fi 'l-Mulāḥ wa-n-Nawādir 「笑話と小話とに関する宝石集成」、AbūḤayyān at-Tawḥīdī (1023年没) の K. al-Imtā' wa-l-Mu'ānasa 「享楽と親交」、al-Ābī (1030年没) の K. Nathr ad-Durar fi 'l-Muḥāḍarāt 「談話に関するばら散かれた真珠」、ath-Tha'alībī (1037年没) の K. Ghurar an-Nawādir 「小話の真髓」、al-Khaṭīb al-Baghdādī (1071年没) の K. at-Taṭfīl wa-Hikāyāt at-Tufayliyīn wa-Akhbār-hum wa-Nawādir Kalām-hum wa-Ash'ār-hum 「ただ食いと、食客達の話……」、ar-Rāghib al-Iṣfahānī (1108年没) の K. Muḥāḍarāt al-Udabā' wa-Muḥāḍarāt ash-Shu'arā' wa-l-Bulaghā' 「文人達の談話と詩人達・弁論家達の談話」など、笑話・小話を含む作品は次々と著されていく。

しかし、次第に古人の奇言・奇行は忘れ去られ、或いは別人の話となっていく。例えば、Ibn Bāba (1108年以後没) の K. Ra's Māl an-Nadīm 「飲み仲間の資本」には、小話の持ち主として、Ibn Abī 'Atiq (8世紀前半没)、Ash'ab (771年没?), Juḥā, Abu'l-'Aynā' (896年没)、Abu'l-'Ibar (864年没)、Abu'l-'Anbas (888年没)、Ibn al-Jaṣṣās (928年没) という名の通った7人が列挙されている⁶⁾が、al-Fihrist の挙げた9人(或いは26人)と重なるのは、Juḥā ただ1人である。⁷⁾ 因に、al-Fihrist 以前の adab 書から記され続けているのは、Ḥamza b. Bayd (738年没)、Muzabbid al-Madanī (758年没)、al-A'mash (765年頃没)、Ash'ab, Abū Dulāma (776年 or 786年没)、Abū Nuwās (814年頃没)、Abu'l-'Aynā' などの小話である。⁸⁾

では、何ゆえ笑話が愛され、盛んに記されたのであろうか。K. Akhbār az-Zirāf wa'l-Mutamajjīnīn 「機知に富む者達やからかい合う者達の情報」、K. [Akhbār] al-Adhkiyā' 「賢い者達[の情報]」なども著した Ibn al-Jawzī (1200年没) は、その著 K. Akhbār al-Ḥamqā wa'l-Mughaffalīn 「愚か者達と間抜け達の情報」において、笑話を集録する理由を3つ挙げている、第1: 理性ある者は愚か者と間抜けの話聞き、自分の恵まれた天賦を知って神に感謝する、第2: 注意深い者は間抜け(不注意者)の叙述を自分に対する教訓とする、第3: 人はこうした不運な者の行為を見、自分の心にくつろぎを与える、である。⁹⁾ また、Ibn 'Abd Rabbih は前掲書において、笑話は魂の散策、心の春、聴の牧場、休息の出所、喜の鉱山で、預言者 Muḥammad も「時に応じて気晴らしをせよ。精神は疲れると盲目になる。」と言った、と述べる。¹⁰⁾

(Ⅲ)

Juḥā について、現存する文献での最古の言及は、al-Jāhīz の Risāla fi 'l-Hakamayn 「両審判者に関する書簡」と K. al-Qawl fi 'l-Bighāl 「騾馬に関する言」であろう。¹¹⁾ 前者は Juḥā を愚行で有名な者達の1人に数え、後者は Abu'l-Ḥasan [al-Madā'inī (840年頃没)?] から借用した話として、Juḥā が或る Ḥimṣ (在シリア) の人に予想外の機知に富む言い返しを行なったことを記す。¹²⁾ 即ち、Juḥā が人並み外れた優劣の両面性を持つ人物として挙げられている。そして、前述の通り、Ibn an-Nadīm の頃には、既に Juḥā の奇妙な言行を集めた書物が世に出回っていたようだ。

また、al-Jawharī (1010年以前没) の K. Tāj al-Lughā wa-Ṣiḥāḥ al-'Arabīya 「言語の冠とアラビア語の正則」には、Juḥā の kunya (子連れ名) が Abu'l-Ghuṣn であることが、al-Ḥuṣrī の前掲書には、Juḥā の死去を Abu'l-'Ibar (864年没) が指輪に銘記したことが、at-Tawḥīdī の前掲書には、Juḥā が言葉巧みに Abū Muslim (755年没) から金子をせしめた話が、それぞれ記されている。¹³⁾ 更に、al-Ābī の前掲書には、後述する、馬鹿を装った Juḥā と Abū Muslim、或いは機知に富む Juḥā と al-Mahdī (アッバース朝3代カリフ、785年没) との話などに加えて、al-Jāhīz が語ったとして、Juḥā は自名を Nūḥ, kunya を Abu'l-Ghuṣn と言い、100歳を越えて、al-Manṣūr (アッバース朝2代カリフ、775年没) の治世まで生き、al-Kūfa (在イラク) に住んでいたこと、'Umar b. Abī Rabi'a (712年没)

が「貴女、我が心を惑わせ、もて遊ばば、我、狂おしく、Juhā の如くなりけり。」という詩を詠んだことが記載されている。¹⁴⁾

次いで、al-Maydānī (1124年没) は、その著 K. Majma' al-Amthāl 「ことわざ集成」において、“Juhā よりも愚かな”という諺の下に、Juhā は Fazāra 族 (アラブの部族) 出身で、Abu'l-Ghuṣn という kunya を持つと紹介し、Juhā の愚かさを示すとする、'Īsā b. Mūsā (783年没) などとの後述する3話を挙げている。¹⁵⁾ ところが、Ibn al-Jawzī になると、その K. Akhbār al-Hamqā wa-'l-Mughaffalīn において、Juhā の話は大部分が間抜けを示しているが、賢い者としての話もあると注意を促し、Makī b. Ibrāhīm (830年頃没) が語ったとして、Juhā は賢く機知に富む人物で、隣人達が彼をからかって馬鹿話をでっち上げたという説を紹介し、まずは Ismā'īl b. Abī Khālid (763年没) の家をめぐる賢い Juhā の話を挙げ、以下に間抜けな Juhā の話を記していく。¹⁶⁾

このように、Juhā は馬鹿かと思えば、賢いとも言われ、al-Jāhiz の箇所ですべたように、Juhā が一概に愚か者では納まらない面を持っていたことは疑いがない。そして、その原型となった人物は、Abu'l-Ghuṣn という kunya を持ち、[自名は Nūḥ で、Fazāra 族に属し (Abu'l-Ghuṣn Nūḥ al-Fazārī),] al-Kūfa に、8世紀中頃まで生きていたと言えよう。

因に、Nasreddin Hoca 登場以後の、Ibn Shākir al-Kutubī (1363年没) の K. 'Uyūn at-Tawāriḥ 「歴史の泉」や、ad-Damīrī (1405年没) の K. Ḥayāt al-Ḥayawān al-Kubrā 「動物の偉大な生活」、al-Fīrūzābādī (1414年没) の K. al-Qāmūs al-Muḥīṭ 「言海」などには、Dujayn b. Thābit とする人物 (al-Baṣra の人?, 777年没?) も Juhā と呼ばれたことが挙げられている。¹⁷⁾

(Ⅳ)

Juhā に帰せられる笑話を、13世紀以前のアラビア語作品から拾ってみる。

1. Abū Muslim al-Khurāsānī が al-'Irāq に来た時のこと、Juhā は Yaqtīn b. Mūsā に、
「Abū Muslim 閣下にお目にかかりたいのじゃが。」

と言っておいた。そこで、Yaqtīn は Juhā を呼んで言った。

「Abū Muslim 閣下をお訪ねする準備をしておきなさい。」

翌日になり、Abū Muslim が座についた時、Yaqtīn は Juhā のところに人を遣わし、彼を呼んだ。Juhā が Abū Muslim のところに通されると、Abū Muslim が座の前列に、Yaqtīn がその横にいたのだが、Juhā は挨拶をすと言った。

「Yaqtīn 殿、お二方のうち、どちらが Abū Muslim 閣下なので御座りますのじゃ。」

Abū Muslim は噴き出して口に手を当てたが、それまで Abū Muslim が笑うのを誰も見たことがなかったのだ。¹⁸⁾

1'. Abū Muslim が al-Kūfa に来た時、まわりの者に言った。

「お前達の中で Juhā を知っている者がおるなら、私のところに呼んで来てくれ。」

すると、Yaqṭīn が、
「私が存じております。」

と言って、Juḥā を呼んで来た。

Juḥā が入って来ると、部屋の中には Abū Muslim と Yaqṭīn しかいなかったのに言った。
「Yaqṭīn さん、お前さん方のうち、どちらが Abū Muslim さんかね。」¹⁹⁾

2. al-Mahdī が Juḥā をからかってやろうと思い、Juḥā のために革の敷物と刀を持って来させた。
Juḥā がその敷物に座らされ、首切り人が Juḥā の首元に立って、刀を振った時、Juḥā は首切り人の方に顔を上げて言った。

「吸玉で血を抜いたんだから、そこんどこに刀を降ろさないように気をつけてくれよ。」

al-Mahdī は笑って、Juḥā に許しを与えた。²⁰⁾

3. ある日、市場の中を走っている Juḥā を見て、人々が言った。

「どうしたんだい。」

「主人が髯を染めている女奴隷は通らなかったかい。」²¹⁾

4. ある日、Juḥā が jāmi' (会衆モスク) の門のところを通りかかって言った。

「このお屋敷はどなたのもんですか。」

人々が答えた。

「これは jāmi' のモスクですよ。」

「Jāmi' さんにアッラーのお恵みをノモスクを建てなさるとはご立派なことですなあ。」²²⁾

5. ある日、Juḥā は着物に香を焚き染めていたが、着物に火がついてしまったので言った。

「これからは絶対に裸でしか香を焚かないぞ。」²³⁾

6. 「月は何と美しいんだろう。」

と或る人が言うのを聞いて、Juḥā が言った。

「いや、全く。特に夜はいいねえ。」²⁴⁾

7. Juḥā が袖の中に桃を幾つか入れて、人々のそばを通りかかると、言った。

「俺の袖の中に何が入ってるか言い当てた者には、一番大きな桃をやるぜ。」

「桃だ。」

「お前達に教えやがったんは売女の息子に違いねえ。くそー。」²⁵⁾

8. Juḥā が al-Kūfa の山手で、ある場所を掘っていると、'Īsā b. Mūsā al-Hāshimī が通りかかって言った。

「Abu 'l-Ghuṣn よ、どうしたのかね。」

「実はこの砂漠にお金を埋めたんですが、その場所に行き当たらないんです。」

「何か目印を付けておけば良かったのに。」

「そうしたんですが。」

「何を目印にしたのかね。」

「雲の下だったんですが、その印がわからないんです。」²⁶⁾

9. Juhā が、

「お前の顔はどうして長いんだい。」

と言われた。

「夏に生まれたもんでね。もし冬が来なかったら、俺の顔は溶けちまっていたろうな。」²⁷⁾

10. Juhā の家で小麦粉をこねていた。彼は〔パンを焼くため〕薪を求められると、言った。

「薪はないんだ。fatir (パン種なしのパン) にしてくれ。」²⁸⁾

11. Juhā が村へ出かけようとしたところ、言われた。

「御無事で (アッラーがお供下りますように) ！」

「そう言われるほど遠い所じゃないんですがね。」²⁹⁾

12. Juhā は母親が亡くなると、泣きながら言い始めた。

「お袋にアッラーのお恵みを！お袋の〔施しの〕門 (隠意：陰門) はいつも開かれ、お袋の持ち物 (隠意：内体) はいつも惜しみなく使われてたんだから。」³⁰⁾

13. Juhā の叔母が亡くなった。そこで、人々は言った。

「行って、叔母さんに塗る香を買っておいで。」

「葬式に間に合わなくなるかなあ。」³¹⁾

14. Juhā の父親のアビシニア人女奴隷が死んだ。そこで、父親はその女の経かたびらを買わせに、Juhā を市場へ遣った。ところが、なかなか戻って来ないので、父親は別の者を遣り、経かたびらを買って来させ、葬儀を無事に済ませた。Juhā は葬儀が済んだ後に戻って来て、墓の間を走りながら言った。

「俺が経かたびらを持ってるアビシニア女の葬式を見なかったかい。」³²⁾

15. Juhā は、

「計算を習ったかい。」

と言われた。

「ああ、わからないものはないぜ。」

「じゃあ、4 dirham (銀貨) を3人に分けてくれないか。」

「2人が2 dirham ずつとって、3人目はなしだ。あと2 dirham できるまで我慢しな。それをもらえば同じになるんだから。」³³⁾

16. ある日、Juhā の雌騾馬が暴れ、彼は思わぬ方向へ連れて行かれた。友達がこれを見て、言った。

「おい、Abu 'l-Ghusn, どこへ行くんだい。」

「騾馬の用事だよ。」³⁴⁾

17. 市場へ水がめを売りに行くと、人々が言った。

「これは穴があいているぞ。」

「この穴からは何も漏れないよ。お袋が綿を入れてたけど、何も漏れなかったんだから。」³⁵⁾

18. ある日、Juhā が瓶を持って川の水を汲みに行ったところ、瓶が手から落ちて、川の中に沈んでしまった。彼が川岸にじっと座っていると、友達が通りかかって尋ねた。

「どうして、ここに座ってるんだい。」

「瓶が沈んだんで、膨れて浮かび上がってくるのを待ってるんだ。」³⁶⁾

19. ある日、Juhā が肉を買ったが、鷺がその肉を目がけて降りて来て、奪って飛んで行ってしまった。彼はその鷺を見ながら言った。

「哀れな奴め。どこから辛子を取って来て食うんだ。」³⁷⁾

20. Juhā の母親が結婚式へ出かける際、彼を家に残し、

「戸の番をするんだよ。」

と言っておいた。彼は昼まで座っていたが、母親の帰りが遅いので、立ち上がり、戸を外して背負い、母親のところまで行った。母親はそれを見るや、言った。

「どうしたんだね。」

「おっ母さんが戸の番をしろと言ったから、ほら、この通り、しっかり番をしているんだよ。」³⁸⁾

21. Juhā のうちには 'Umayya という名の女奴隷がいたが、ある日、彼の母親がその女奴隷をぶった。女奴隷が叫び声を上げたので、近所の者達が戸口のところに集まって来た。そこで、Juhā は出て行って言った。

「何でもないんだ。お袋が 'Umayya を鞭でぶっている（陰意：自慰行為をしている）だけなんだから。」³⁹⁾

22. ある日、Juhā が家に入ると、父親の女奴隷が眠っていた。そこで、彼女に寄り掛かったところ、女は気が付いて言った。

「あんたは誰なの。」

「静かに！俺の親父だよ。」⁴⁰⁾

23. Juhā の怪我が治った時、言われた。

「何をつけて治ったんだい。」

「“両親血”（正しくは“兄弟血”即ち、麒麟血）さ。」⁴¹⁾

24. Juhā が庭園に入ったところ、着物が木に引っ掛かった。そこで、振り返って言った。

「お前が畜生でなかったら、鼻をへし折ってやるところなんだが。」⁴²⁾

25. ある日、Juhā が沈んだ顔をしていたので、言われた。

「どうしたんだい。」

「お袋が屋根から落ちて madhākīr（男根、manākhīr「鼻」の言い誤り）を打ったんだよ。」⁴³⁾

26. Juhā の家にいちじくの木があった。その家は母親の所有であった。父親が人々を招いたところ、皆が酔って、庭で小便をし始めた。そこで、Juhā は母親に言った。

「おっ母さん、この人達はおっ母さんのいちじくの木（陰意：肛門）の根元におしっこをかけてる

よ。」⁴⁴⁾

27. ある日, Juhā は未だ暗いうちに家を出たところ, 家の廊下で死人につまづいた。怖くなって, 死体を家の井戸に引き摺って行き, その中に投げ込んだ。ところが, 父親がそれに気づき, 死体を引き上げて隠し, 雄羊を締めて殺し, 井戸に投げ込んだ。一方, 死人の家族は al-Kūfa の道々を巡っては, その者を捜していた。Juhā は彼らに出くわすと, 言った。

「うちに殺された人がいるから, その人かどうか見てごらんよ。」

それで, 彼らは Juhā の家へ寄り, 彼を井戸に降ろした。Juhā は雄羊を見ると, 叫んで言った。

「おーい, その人には角があったかい。」

彼らは笑って, 行ってしまった。⁴⁵⁾

28. 'Abbād b. Ṣuhayb が語った話である。

私は Ismā'il b. Khālīd 殿の話を書くために al-Kūfa に着きました。老人が座っているそばを通りかかったので尋ねました。

「御老人, Ismā'il b. Khālīd さんのお宅へはどう行けばよろしいのでしょうか。」

「お前さんの warā' (通常の意味「後ろ」) じゃ。」

「後戻りするのですか。」

「お前さんの warā' と言ったのに後戻りするのかね。」

「私の warā' のは後ろのことではないのですか。」

「いいや。」

そして言うのです。

「'Akrama が Ibn 'Abbās から聞いて語ったことじゃが, 『あの人達の warā' に〔あらゆる舟を力づくで取り上げる王が〕いた。』とは, 即ち彼らの手前にはということじゃ。」

「御老人, あなた様は一体どなたですか。」

「わしは Juhā じゃよ。」⁴⁶⁾

29. Abu 'l-Ḥasan による話である。

ある人が Juhā に言った。

「お前の家から叫び声が聞こえたんだが。」

「俺の肌着が落ちたんだよ。」

「肌着が落ちたくらいでか。」

「馬鹿, 俺が着ていたら, 俺も一緒に落ちていたところなんだぞ。」⁴⁷⁾

30. Juhā の隣の人々が亡くなったので, Juhā は墓掘り人のところへ遣らされた。ところが, 掘り賃のことで2人は口喧嘩になったため, Juhā は市場へ行き, 2 dirham で板切れを買って帰って来た。彼はその板切れについて聞かれるや, 言った。

「あの墓掘りは 5 dirham 以下では掘らないと言うんで, 俺が 2 dirham でこの板切れを買って来たんだ。隣の人をこれに縛りつけたら, 3 dirham 浮くし, 隣の人も墓の重みや, Munkar と Nakīr の

尋問から解放されるというもんさ。」⁴⁸⁾

31. Juhā の父親の家の戸口に、崩れた土塊が溜っていた。そこで、父親が言った。
「近所の人達がこの土の山を捨てろと、やいのやいの言うんで、何とかしなきゃならないんだが、煉瓦を作れる土でもなし、どうしたらいいかわからないんだがね。」

すると、Juhā は言った。

「これしきのことがわからないようじゃ、どうしようもないよ。」

「どうしたらいいか教えておくれ。」

「井戸を幾つか掘って、そこに埋めたらいいんだ。」⁴⁹⁾

32. ある日、Juhā は小麦粉を買い、それを人夫に運ばせたところ、その男は小麦粉を持ったまま逃げてしまった。何日か後、Juhā はその男を見かけるや、隠れたので、言われた。

「どうして、そんなことをするんだい。」

「あいつが運び賃を請求しないかと思ってね。」⁵⁰⁾

33. Juhā の父親が彼を、丸焼きにした羊の頭を買いに行かせた。Juhā は頭を買うと、道端に座りこんで、羊の目と耳と舌と頭皮を食べてしまい、残りを父親のところに持って帰った。父親が言った。

「こら、これは何だ。」

「これは父さんに頼まれた羊だよ。」

「目はどこだ。」

「こいつは盲だったんだよ。」

「じゃあ、耳は。」

「こいつは聾だったんだよ。」

「舌は。」

「こいつは啞だったんだよ。」

「頭の皮は。」

「こいつは禿頭だったんだよ。」

「こら、これを返して、代わりのをもらって来い。」

「片輪だからこそ売ってくれたんだよ。」⁵¹⁾

34. ある人が Juhā に言った。

「お前さんは指で計算が上手にできるかね。」

「うん。」

その人が、

「小麦 2 jarīb。」

と言うと、Juhā は小指と薬指を折り曲げた。

「大麦 2 jarīb。」

と言うと、Juhā は人差し指と親指を折り、中指を立てた。

その人は言った。

「どうして中指を立てたんだね。」

「小麦と大麦が混ざらないようにするためだよ。」⁵²⁾

35. Juhā の父親がある時メッカ Makka に巡礼に出かけたのだが、その見送りに際して Juhā は言った。

「あんまり長く家を空けないようにしておくれよ。巡礼のお祭り（犠牲祭）には、羊があるから、うちにいるようにしておくれよ。」⁵³⁾

(V)

以上の話をモチーフ別に分けて検討する。

(1) 愚者譚 (第 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 17, 18, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 34, 35話)

その大半が家庭・近所・往来・市場・モスクといった都市庶民の日常生活の場を舞台に、Juhā と彼ら庶民との間に生起する話であり、Juhā が彼らに笑われる筋書きになっている。

これは、庶民がその日常生活の中から、本来の Juhā の愚か話を利用して、それらに脚色を加えたり、或いは Juhā の名の下に、新たに創り出した話が多いことを窺わせる。そして、Juhā を自分達よりも劣った存在に据え、言わばスケープ・ゴートにして、彼を笑い下すことにより、日常のフラストレーションの解消を図っている、更に言えば、被支配者としての現実の憂さを晴らしているのではなからうか。即ち、Juhā の愚か話は、彼らの溜って増大したエントロピーを発散させる手段であり、彼らの現実の代償作用を果たしていると言えよう。

尤も、Juhā の方から見ると、自らの才能によって人々を笑わせることに成功を収めた、優れたエンターテイナー・道化と言うことができ、彼はこわばった秩序・日常に混沌・非日常を導入して、日常に新たなる活力を与えているのである。

そして、S. Thompson の「いずれの国においても文盲の人々の間で語られる単純昔話は、愚か者とその愚行に関するものが驚くほど多い。」という言⁵⁴⁾を待つまでもなく、Juhā に帰せられる小話の圧倒的多数も愚者譚であり、とかく名士・学者・詩人の逸話が多い adab 書の中で、下々の者の生活が描かれているのは注目すべきことと言えよう。

次に、個々の話に触れてみると、第 8 話は同類のモチーフが日本—「雲の目標」や「犬の目標」他—を始め、フィンランド、エストニア、ラトヴィア、イギリスなどに、第 20 話も、日本—「法事の使」や「一つ覚え」—を始め、スペイン、中国、インド、インドネシア他に見られる。⁵⁵⁾ また、第 27 話も、類似の話がフランス、ドイツ、スロヴェニア、インド他に見られる。⁵⁶⁾

これに対して、葬儀の話が目立つが、第 4, 5, 11, 12, 13, 14, 30, 35 話はイスラーム、或い

は当時のアラブの慣習と結びついた話であり、特に第13, 30, 35話などは、アラブ・イスラーム圏以外では別に笑話にならないかも知れず、言わば地域型の話である。ついでに触れると、第5話は愚者譚に分類したが、香を着物に焚き染めることが、もしも一部の人だけの風習であった場合には、彼らを皮肉るために Juḥā が語った話とも取れる。

また、第12, 21, 25, 26話はいわゆる艶笑談であるが、いずれも意味の取り違い、言い間違いを利用したもので、直接的な描写はなく、婉曲的に表現されている。

これら訳出した愚者譚のうち、第7, 18, 20, 32話は殆どそのままの話が、第17, 19, 29, 31話はよく似た話が、それぞれ Nasreddin Hoca 物語の中に見られ、⁵⁷⁾ Nasreddin にアラブ起源の話が含まれている可能性が高い。

その他、訳出しなかったが、13世紀以前のアラビア語作品に Juḥā 以外の話として登場し、後に Juḥā (更には Nasreddin) の話としても有名になったものには、自分の乗っている驢馬を数え忘れ、降りた方が1頭増えると思い、歩いて行く話、⁵⁸⁾ 驢馬がいなくなったのに、自分が乗っていないくてよかったとアッラーに感謝する話、⁵⁹⁾ 驢馬とすり替わった男に、呪いが解けて驢馬から人間に戻ったと言われ、信じ込む話⁶⁰⁾ など、驢馬を題材にした話が多い。これは、驢馬が庶民にとって最も身近な動物の一つであり、彼らの交通・運搬手段であったことを考えれば、当然と言えようが、馬鹿の代名詞たる驢馬とその上を行きそうな Juḥā との組み合わせは、笑いを一層誘うところがある。

また、死者が何もない家へ運ばれると葬列の泣き女が言うのを聞き、そばの貧乏人に、お前のところだと言う話、⁶¹⁾ 家の半分だけ相続したので、それを売って残りの半分を買い、家全体を所有しようとする話、⁶²⁾ 割ろうとしたアーモンドが跳ねたので、「けもの」さえ死から逃れようとする驚く話、⁶³⁾ 兄弟とどちらが年長かと尋ねられ、自分が1歳だけ年上だから、来年は2人とも同い年になると答える話、⁶⁴⁾ 自分の証として身体に括り付けておいた南瓜を他人が付けたので、自分がわからなくなる話、⁶⁵⁾ 大声を出して走り、自分の声を遠くから聞こうとする(或いは、自分の声がどこまで届くかを知ろうとする)話、⁶⁶⁾ 尖塔の建て方を尋ねられ、井戸を逆さにするのだと答える話、⁶⁷⁾ 足にとげが刺さったのに、新しい靴を履いてなくてよかったとアッラーに感謝する話、⁶⁸⁾ 生まれの星宿を尋ねられ、子山羊の宮(摩羯宮)だったが、もう大きくなって雄山羊の宮になっていると答える話⁶⁹⁾ なども、13世紀以前のアラビア語文献に現われ、Juḥā (及び Nasreddin) の話としても知られるようになったものである。

なお、訳出した部分には父母との話も幾つか含まれ、子供としての Juḥā も登場しているが、後世に作られた話になると、間抜けな彼を取り巻くキャラクターとして、頑固一徹な妻と、何にでも口を出したがる息子が登場し、それに愚鈍で頑固な驢馬が Juḥā の家族を構成するようになる。

(2) 賢者譚 (第2, 15, 16, 28話)

ここでは庶民・名士に対する話の他に、新たに第2話の権力者に対する話が登場してくる。Juḥā なる人物が宮廷道化として実在した可能性があると共に、現実には権力者に頭の上がらない庶民が、自分達の分身として Juḥā なる人物を創造し、彼が権力者よりも賢いところを見せる筋書きによっ

て、日頃の劣等感を忘れ、淡い優越感に浸ろうとしたと考えることも可能ではなかろうか。

また、第28話は 'Abbad 以外が語った類似の話も持つが、共に Ibn al-Jawzī (或いは Makkī b. Ibrāhīm) により、Juhā の賢さを示す例として挙がっており、アラビア語によくある「対義語」を活用し、教養人ならではの逸話である。

更に、第15、16話は Nasreddin 物語にも見られる、⁷⁰⁾ よく知られた話である。

そして、13世紀以前のアラビア語作品中に原型を持ち、次第に Juhā の話としても定着していく賢者譚では、まず名裁き手としての Juhā が登場してくる。例えば、楽器を盗んだ被告に、原告側の証人は酒屋と遊び人なので有効ではないと言われるや、法官の Juhā は酒場の楽器についてはこの2人よりも適した証人はいないと切り返す話⁷¹⁾ などである。

これは、100歳以上の男でも若い女と結婚すれば子供ができるかと尋ねられ、2、30歳の男が隣に住んでいればできると答える話、⁷²⁾ どこを向いて大浄すべきかと問われ、脱いだ服の方だと答える話、⁷³⁾ 天井がきしんでいるのはアッラーを称えているのだと家主に言われ、天井がアッラーを畏れて平伏し(即ち、落ち)ないかと心配だと応じる話⁷⁴⁾ などと共に、狡猾さを感じさせない巧智譚に属すると言えよう。

他方、S. Thompson は利口者の話に関して「最も人気のある小話と笑話の大部分は狡知に関係したものである。」と述べている⁷⁵⁾ が、同じく13世紀以前のアラビア語作品から後世 Juhā に取り込まれた話の中には、物乞いを追い払ったり、ベドウィンから物を取り上げたりする、言わばずる賢い Juhā も見られる。例えば、物乞いが来たので、クルアーンや詩の一節を持ち出して言葉巧みに断わる話⁷⁶⁾ や、砂漠で喉が渇き、ベドウィンから水袋を買った後、油っこい物を分け与えて、水が欲しくなったベドウィンに、同じ値段で1口だけ飲ませてやる話⁷⁷⁾ などである。

こうした話は都市の庶民が特に好むもので、彼らにとって物乞いとベドウィンは最も嫌うなり軽蔑していた層であったようだ。

また、アミールと共にした食事をまずいと言ったので吐かせられようとした時、〔吐いたら〕誰が夕食を保証してくれるのかと応じる話⁷⁸⁾ のような対権力者譚を始め、付けでオリーブを買おうとした女性が期間を過ぎてから断食しているのを知り、彼女に売るのを断わる話、⁷⁹⁾ いなくなった驢馬が見つければ1 dinār (金貨)で売ると誓い、見つかった時に、猫を100dinār にして一緒に売ろうとする話、⁸⁰⁾ 妻2人の各々に、他方には内緒だと言って首飾りを贈り、その2人が一緒の時、首飾りを贈った方をより愛していると言う話⁸¹⁾ など、どちらかと言えば、狡知な話に含まれよう。

更には、13世紀以前のアラビア語作品に源泉があると思われる Juhā 話に、「子を産む鍋」の話として有名で、同類のモチーフがルーマニア、セルボクロアチア、サロニカ、インド、インドネシアなどにも見られる(少くとも一部は Nasreddin を通して広がった)話⁸²⁾ や、逃げた被告の代わりに法官をぶつ「罰のすり替え」の話⁸³⁾ などがある他、後世の Juhā 話には、日本の「裸の泥棒」に似た話⁸⁴⁾ や、日本の愚か村話にも一脈通ずる「いなか者」ベドウィンに対する話もあるようだ。

(3)偽愚者譚(第1、22、33話)

この分類は‘A. M. al-‘Aqqād の考えを活用したものである⁸⁵⁾が、賢者譚の場合と殆ど重なり合う性格の Juḥā が登場する話であり、S. Thompson の Motif Index に従えば、賢者譚として一つに括られることになろうか。

第1話は宮廷道化的な Juḥā の話で、彼が Abū Muslim を笑わそうと仕組んだ、知恵者ならではの話だと思われるが、al-Maydānī はこれを第1話のように紹介し、Juḥā の愚かさを示す一例としている。

また、第22、33話はいずれも、Juḥā が馬鹿を装うことによって、窮地を切り抜けようとする、彼のずる賢さを窺わせる話である。

そして、13世紀以前のアラビア語作品中に現われ、後に Juḥā 話に取り込まれていく話には、白紙の手紙を携えて結婚式に入り込み、食事にあつく話⁸⁶⁾などの食客(伴食者)たる Juḥā が登場するものの他、家財を盗んだ泥棒の後を、残りの家財を持ってついて行き、お前の家に引っ越すんだという話⁸⁷⁾、粗末な服を着て行って相手にされなかった宴会に、立派な服を着て行くと歓待されたので、自分の袖に料理を食べろと言う話⁸⁸⁾、召使いに水がめを渡して殴り、割らないように先に折檻を加えたのだと言う話⁸⁹⁾など、よく知られたものがある。

食客の話はけちんば話と同様に、それだけで一冊の書をなすほど数多くあり、食客はいわゆる道化として、形に嵌まった、常識に支配される社会生活の一種の潤滑油の作用を果たしていたと言える。

その他、前述の Makkī b. Ibrāhīm の言と関連するが、からかう者達に対して馬鹿者の振りをしながら、彼らを打ち負かす話⁹⁰⁾も見られるようだ。

(VI)

Juḥā の名はペルシア語世界にも伝わり、Minūchihrī (1041年以後没)、Nāsir-i-Khusraw (1061年没)、Adīb Ṣābir (1144年没)、Anwārī (1191年没)といったイランの詩人達には、Juḥī の名で知られている。また、Jalālū'd-Dīn Rūmī (1273年没)もその神秘主義詩 Mathnawī-i-Ma'nawī「精神的マスナビー」の中に Juḥī、即ち Juḥā の笑話を取り入れている。⁹¹⁾

そして、Rūmī はこの作品をアナトリアでの布教活動に利用しているので、Juḥā の物語がトルコ人の間でも知られるようになったことは大いにありうる。丁度その頃、Nasreddin の笑話が登場してくるのだが、前述の通り、その一部は Juḥā の笑話として既に知られていたものである。

その他、Juḥā は北アフリカのベルベルの間では Si Jeha、ヌビアでは Jawha、マルタでは Jahan、シチリア及びイタリアでは Giufa 或いは Giucca の名で知られるようになった。

ところが、この Juḥā は人格が分裂しており、現実の一個人では収まりきれない存在である。彼の笑話が別人の逸話や全くの創作を含んでいる結果であるが、ある特定の人物のまわりに笑話が集束していくことは、日本の吉四六話などを挙げるまでもなく、洋の東西を問わずに見られる現象で

あろう。⁹²⁾

‘Abd al-Hamīd Yūnis は、この Juhā に見られる賢さと嘲笑こそアラブ民衆の性格の特徴をよく表しており、Juhā を通して人々は悲劇が喜劇に変わり得ることを発見するのだと言っている。⁹³⁾とにかく、Juhā は日常生活の粋を気かけず、自分の望むままに言ったり行なったりする、いわゆるトリックスター・道化であり、山口昌男氏の言葉を借りれば、Juhā は「世間知なるものが、全く一時的な約束の上にしか成り立っていないことを示し、もっと深い知恵がありうることを示す。」⁹⁴⁾のである。

なお、こうした Juhā の原型となった人物は、實在・非實在とを問わず、8世紀のウマイヤ朝からアッバース朝への過渡期に生きたとされており、先の ‘A. Yūnis は、このことを Juhā の持つ移行性⁹⁵⁾及び変容性と関連づけている。

そして、Juhā はその時以来、アラブ民衆と共に歩み、途中で彼と類似の性格を持つトルコ人 Nasreddin Hoca と混ざり合いながら、イエーメンを除くアラブ世界⁹⁶⁾の民衆の間で、笑い⁹⁷⁾を代表する人物として、現在でも生き続け、Juhā の笑話は日々により作られているのである。

註

- 1) 例えば、Hikmat Sharif at-Tarābulī による Nawādir Juhā al-Kubrā (Beirut, 2nd ed., 1980)
 - 2) クルアーン56章35～37節
 - 3) ar-Rāghib al-Isfahānī, K. Muḥāḍarāt al-Udabā’ wa-Muḥāḍarāt ash-Shu’arā’ wa-l-Bulaghā’, vol. I, Beirut, 1961, p. 282; an-Nuwayrī, K. Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab, vol. IV, Cairo, 1925, p. 3; cf. Thomas Patrick Hughes, A Dictionary of Islam, London, 1885, p. 249
 - 4) Franz Rosenthal, Humor in Early Islam, Leiden, 1956, pp. 3—4
 - 5) ed. Gustav Flügel, Leipzig, 1871—2, p. 313
 - 6) Ms. Istanbul, Nuru Osmaniye 3296 [F. Rosenthal の前掲書 pp. 11—3 より]
 - 7) 但し、Ibn Abī ‘Atīq, Abu ‘l-Aynā’, Abu ‘l-Ibar, Abu ‘l-Anbas の著作は、K. al-Fihrist にも挙がっている(各々, pp. 101と148, 125, 153, 152)。
 - 8) Bāqil (ジャーヒリーヤ時代に活躍), Habannaqa (7世紀に活躍?), Bahlūl (799年没?) といった愚か者や気違いの話もよく知られている。また、al-Fihrist 以後に登場するものとしては、Sībawayh al-Miṣrī (968年没) や、Qarah Qūsh (1191年以後没) といったエジプトの小話が特に有名である。
 - 9) ed. Beirut, n.d. (以下、この書を Akhbār al-Hamqā と略記), pp. 15—6
 - 10) ed. Muḥammad Sa’īd al-Uryān, vol. VIII, Cairo, 2nd ed. 1953, p. 81
- 補) Ibn al-Jawzī 以降の作品で小話・笑話を多く含むものには、al-Balawī (1207年没) の K. Alif Ba’, Ibn Mammātī (1209年没) の K. al-Fāshūsh fī Ḥukm Qarah Qūsh, ash-Sharīshī (1222年没) の K. Sharḥ Maqāmāt al-Harīrī, al-Waṭwāt (1318年没) の K. Ghurar al-Khaṣā’is al-Wāḍiḥa wa-‘Urar an-Naqā’is al-Fāḍiḥa, an-Nuwayrī (1333年没) の前掲書, Ibn Shakir al-Kutubī (1363年没) の K. ‘Uyūn at-Tawārikh 及び K. Fawāt al-Wafayāt, Ibn Hija (1434年没) の K. Thamarāt al-Awrāq, al-Ibshihī (1446年没) の K. al-Mustaṭraf fī Kull Fann Mustaṭraf, an-Nawājī (1455年没) の K. Halbat al-Kumayt fī ‘l-Adab wa-n-Nawādir al-Muta’alliqat bi-‘l-Khamriyāt, 著者不詳の K. Mudḥik al-‘Abus, al-Ghazzī (1577年没) の K. al-Marāḥ fī ‘l-Muzāḥ, Dāwūd al-Anṭakī (1599年没) の K. Tazyīn al-Aswāq bi-Tafṣīl Ashwāq al-‘Ushshāq, Ibn Ilyās al-Hanafī (1650年没?) の K. fī n-Nawādir al-

- Mudhika wa-l-Hazaliyat al-Mutriba, al-Qalyūbi (1659年没) の K. Hikāyat Gharīb wa-'Ajība, al-Itlidi (1688年没) の K. l'lam an-Nās bi-Mā Waqa'a li-l-Barāmika ma'a Bani l-'Abbās などがある。
- 11) 後述する通り, 'Umar b. Abī Rabī'a (712年没?) が Juḥā に言及したと言われるが, 現存する 'Umar の詩集には見当たらない。また, al-Marzubāni (993年没) によれば, Abū'l-'Atāhiya (825年没) もその詩の中で Juḥā に言及したらしい (K. al-Muwashshah fi Ma'akhidh al-'Ulamā' ala 'sh-Shu'arā', Cairo, 1924, p. 259)
- 12) Risāla fi'l-Hakamayn, ed. Charles Pellat, *Machriq*, Beirut, 1958, p. 431; K. al-Qawl fi'l-Bighāl, ed. Ch. Pellat, Cairo, 1955, p. 36
- 13) K. Taj al-Lugha wa-Shihāh al-'Arabīya, ed. Aḥmad 'Abd al-Ghafur 'At tār, Cairo, 1956, p. 2174; K. Jam' al-Jawāhir fi'l-Mulāh wa-'n-Nawādir, ed. Muḥammad 'Amīn al-Khānjī, Cairo, 1934 (以下, この書を Jam' al-Jawāhir と略記), p. 66; K. al-Imtā' wa-l-Mu'anasa, vol. II, Cairo, 1944, p. 57
- 14) Ms. Dār al-Kutub al-Miṣriya, Adab 4428 (以下, この書を Nathr ad-Durar と略記) ['Abd as-Sattār Aḥmad Farrāj, Akhbār Juḥā (以下, Farrāj と略記), Cairo, 3rd ed., 1980, p. 5 他]
- 15) ed. Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Hamīd, vol. I, Cairo, 1955, pp. 223—4
- 16) pp. 44—8 なお, 14世紀の Ibn Shākir al-Kutubī によれば, ash-Shīrāzi (1083年没) も K. al-Alqāb において, この Makki と同様な意見を述べたようだ (K. 'Uyūn at-Tawārikh, Ms. Paris, 1588, s. a. 160)。
- 17) K. 'Uyūn at-Tawārikh, 同上; K. Hayāt al-Hayawān al-Kubrā, Cairo, 5th ed. 1978, vol. I, p. 462; K. al-Qāmūs al-Muḥīt, Cairo, 2nd ed. 1952, vol. IV pp. 223, 255, 312; 更に, 'Uyūn at-Tawārikh には, Ibn Hibbān (965年没) が Dujayn と Juḥā は別人で, 2人ともイスラーム暦160年に亡くなっているが, Juḥā の名は Nuḥ であると言ったと記されている。その他, Juḥā の名は ad-Dujayn b. al-Hārith だとか, tabī'i (ムハンマドの教友の弟子) の 'Abd Allāh も Juḥā と呼ばれたとかいう説もある (az-Zabīdī, Taj al-'Arūs min Jawāhir al-Qāmūs, vol. X, Cairo, 1890, p. 68)。
- 補) Juḥā については, al-Bayhaqī の前掲書, Ḥamza al-Isfahānī (971年以前没) の K. al-Amthāl 'alā l-'Al'al, al-'Askarī (1005年没?) の K. Jamharat al-Amthāl, ar-Rāghib al-Isfahānī 及び Ibn Bābā の両前掲書, al-Qalqashandī (1418年没) の K. Subḥ al-A'shā fi Shīnā'at al-Inshā', Ibn Hija の前掲書, Ibn Hajar al-'Asqalānī (1449年没) の K. Lisān al-Mizān, 著者不詳の K. Mudhik al-'Abūs, as-Suyūṭī (1505年没) の K. Man Nahā ilā Nawādir Juḥā (?), Dāwūd al-Anṭakī の前掲書などにも言及がある。
- 18) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 46]
- 19) K. Majma' al-Amthāl, vol. I, p. 224
- 20) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 58]; Akhbār al-Hamqā, p. 47
- 21) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 84]; Akhbār al-Hamqā, p. 47
- 22) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 84]; Akhbār al-Hamqā, p. 47
- 23) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 85]; Akhbār al-Hamqā, p. 46
- 24) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 85]; Akhbār al-Hamqā, p. 47
- 25) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 87]; Akhbār al-Hamqā, p. 47; cf. Mot. J 2712. 1 (Stith Thompson (ed.), Motif-Index of Folk-Literature, vol. IV, Bloomington, 1966, p. 229)
- 26) K. Majma' al-Amthāl, vol. I, p. 223; Akhbār al-Hamqā p. 47; cf. AT 1278* (Antti Aarne & Stith Thompson, The Types of the Folktale, Helsinki, 1961, p. 384) Mot. J 1922. 2. 1 (vol. IV, p. 164)
- 27) Nathr ad-Durar [Farrāj p. 87]; cf. K. at-Taṭfil wa-Hikāyat at-Tufayliyīn wa-Akhbār-hum wa-Nawādir Kalām-hum wa-Ash'ar-hum, ed. Aḥmad Matlūb & Aḥmad Najī al-Qaysi, Damascus, 1927, p. 63
- 28) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 85]; cf. Akhbār al-Hamqā, p. 131
- 29) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 85]; cf. Akhbār al-Hamqā, p. 148
- 30) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 86]; cf. Akhbār al-Hamqā, pp. 156—7
- 31) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 83]
- 32) ibid. [p. 85]
- 33) ibid. [p. 83]; Mot. J 1241. 2 (vol. IV, p. 92)
- 34) Nathr ad-Durar [Farrāj p. 83]; Mot. J 1483. 2 (vol. IV, p. 116)
- 35) Nathr ad-Durar [Farrāj p. 82]
- 36) ibid. [p. 87]; cf. Mot. J 2066 (vol. IV, p. 173)

- 37) Nathr ad-Durar [Farrāj p. 88]; cf. AT 1689 B (p. 479) Mot. J 2562 (vol. IV, p. 225)
- 38) Nathr ad-Durar [Farrāj, pp. 84—5]; cf. AT 1696 (p. 480) Mot. J 2461 (vol. IV, pp. 214—5)
- 39) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 86]
- 40) ibid. [p. 87]
- 41) ibid. [p. 86]; cf. Mot. J 1805 (vol. IV, p. 151)
- 42) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 87]
- 43) ibid. [p. 88]; cf. Mot. J 1805
- 44) Nathr ad-Durar [Farrāj, p. 88]
- 45) K. Majma' al-Amthāl, vol. I, pp. 223—4; cf. AT 1600 (p. 459) Mot. K 661. 1 (vol. IV, p. 330)
- 46) Akhbār al-Ḥamqā, p. 45; Ismā'il b. Khālīd は正しくは Ismā'il b. Abī Khālīd, 『あの人達の warā' に……いた』はクルアーン 18章79節
- 47) Akhbār al-Ḥamqā, p. 45
- 48) ibid., p. 46; Munkar と Nakir は死者を取り調べ, その悪行に対しては墓の中で罰を加えると言われる天使
- 49) ibid., p. 46; cf. Mot. J 1934 (vol. IV, pp. 165—6)
- 50) Akhbār al-Ḥamqā, p. 46
- 51) ibid., pp. 46—7
- 52) ibid., p. 47
- 53) ibid., p. 48
- 54) Stith Thompson, The Folktale, New York, 1946 [荒木博之・石原綏代訳, 民間説話—理論と展開—(上), 社会思想社, 昭和52年, 282頁]
- 55) 「雲の目標」: 大成新話型 1 B (関敬吾, 日本昔話大成10, 角川書店, 昭和55年, 217頁, カラスの雲あて), 「犬の目標」: 集成309 A (関敬吾, 日本昔話集成 第3部笑話1, 角川書店, 昭和32年, 25—26頁); 「法事の使」: 集成333 (前掲書, 75—84頁), 「一つ覚え」: 集成330 (前掲書, 58—71頁); 他の国々については, 第8話は註26, 第20話は註38の, AT 及び Mot. の箇所
- 56) 註45の AT 及び Mot. の箇所
- 57) 第7話: 護雅夫訳: ナスレディン・ホジャ物語—トルコの知恵ばなし—, 平凡社, 昭和40年, 26頁; Hikmat Sharif 訳の前掲書 (註1), no. 402 (p. 261); 第18話: 護雅夫訳 5頁; 第20話: 護雅夫訳 24頁; Hikmat Sharif 訳, no. 248 (pp. 167—8); 第32話: 護雅夫訳, 21頁; Hikmat Sharif 訳, no. 157 (p. 98); 第17話: 護雅夫訳, 24頁; Hikmat Sharif 訳, no. 263 (p. 179); 第19話: Hikmat Sharif 訳, no. 126 (pp. 80—1); 第29話: 護雅夫訳, 207—208頁; Hikmat Sharif 訳, no. 118 (p. 75); 第31話: 護雅夫訳, 10頁
- 58) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 153; Juḥā : Farrāj, p. 101; Nasreddin : 護雅夫訳, 249—250頁; Hikmat Sharif 訳, no. 378 (pp. 245—7); AT 1287 (p. 385), Mot. J 2031. 2 (vol. IV, p. 170)
- 59) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 170; Juḥā : Farrāj, p. 77; Nasreddin : 護雅夫訳, 242頁; Hikmat Sharif 訳, no. 130 (pp. 82—3); Mot. J 2561 (vol. IV, p. 225)
- 60) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 193; Juḥā : Farrāj, pp. 59—60; Nasreddin : 護雅夫訳, 252—253頁; Hikmat Sharif 訳, no. 84 (p. 58); cf. AT 1529 (p. 437), Mot. K 403 (vol. IV, p. 287)
- 61) cf. K. al-Aghāni, vol. XV, Beirut, 1970, p. 37—8; Juḥā : Farrāj, p. 98; Nasreddin : 護雅夫訳, 114—115頁; Mot. J 2483 (vol. IV, p. 219)
- 62) cf. Jam' al-Jawāhir (註13参照), p. 131; Akhbār al-Ḥamqā, p. 172; Juḥā : Farrāj, p. 81; Nasreddin : 護雅夫訳, 56頁, Hikmat Sharif 訳, no. 270 (p. 184); Mot. J 2213. 6 (vol. IV, p. 194)
- 63) cf. Jam' al-Jawāhir, p. 290; Akhbār al-Ḥamqā, p. 51; Juḥā : Farrāj, p. 81; Nasreddin : Albert Wesselski, Der Hodscha Nasreddin, vol. II, Weimar, 1911, p. 183; Mot. J 1875. 1 (vol. IV, p. 158)
- 64) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 148; Juḥā : Farrāj, p. 106; Nasreddin : 護雅夫訳, 47頁; Hikmat Sharif 訳, no. 296 (p. 205)
- 65) cf. K. Majma' al-Amthāl, vol. I, pp. 217—8; Akhbār al-Ḥamqā, p. 41; Juḥā : Farrāj, p. 63; Nasreddin : 護雅夫訳, 15頁; Hikmat Sharif 訳, no. 106 (p. 69); AT 1284 (p. 385), Mot. J 2012 (vol. IV, p. 168)

- 66) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 110; Juḥā : Farrāj, p. 80; Nasreddin : 護雅夫訳, 26～27頁; Hikmat Sharif 訳, no. 280 (p. 195) ; Mot. J 1941 (vol. IV, p. 166)
- 67) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 171; Juḥā : Farrāj, p. 93; Nasreddin : 護雅夫訳, 41～42頁; Hikmat Sharif 訳, no. 224 (p. 139); Mot. J 2711 (vol. IV, p. 229)
- 68) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 181; Juḥā : Farrāj, p. 100; Nasreddin : 護雅夫訳, 26頁; Hikmat Sharif 訳, no. 384 (p. 251); Mot. J 2199. 4. 1 (vol. IV, p. 192)
- 69) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 185; Juḥā : Farrāj, p. 90; Nasreddin : 護雅夫訳, 52頁; Hikmat Sharif 訳, no. 66 (pp. 45—6) ; AT 1832 N* (p. 501), Mot. J 2212. 6 (vol. IV, p. 193)
- 70) 第15話 : A. Wesselski の前掲書, vol. II, p. 181; 第16話 : 護雅夫訳, 257頁; Hikmat Sharif 訳, no. 403 (p. 262)
- 71) cf. K. al-Adhkiyā', Beirut, 4th ed., 1980, pp. 69—70; Juḥā : Farrāj, pp. 62—3; Nasreddin : Hikmat Sharif 訳, no. 92 (pp. 62—3)
- 72) cf. Nathr ad-Durar; Juḥā : Farrāj, p. 100; Nasreddin : 護雅夫訳, 61頁; Hikmat Sharif 訳, no. 100 (p. 67)
- 73) cf. K. al-Adhkiyā', p. 84; Juḥā : Farrāj, p. 63; Nasreddin : 護雅夫訳, 38頁; Hikmat Sharif 訳, no. 207 (p. 125)
- 74) cf. K. al-Adhkiyā', p. 145; Juḥā : Farrāj, p. 69; Nasreddin : 護雅夫訳, 57頁; Hikmat Sharif 訳, no. 381 (pp. 249—50)
- 75) S. Thompson, The Folktale [荒木・石原訳, 民間説話(上), 281頁]
- 76) cf. K. Muḥāḍarāt al-Uḍabā' wa-Muḥāḍarāt ash-Shu'arā' wa-l-Bulaghā', vol. I (註3参照), p. 556; Juḥā : Farrāj, pp. 65—6
- 77) cf. K. al-Adhkiyā', p. 74; Juḥā : Farrāj, pp. 101—2
- 78) cf. K. 'Uyūn al-Akhbār, vol. III, Cairo, 1930, p. 277; Juḥā : Farrāj, p. 73
- 79) cf. K. Muḥāḍarāt al-Uḍabā' wa-Muḥāḍarāt ash-Shu'arā' wa-l-Bulaghā', vol. I, p. 478; Juḥā : Farrāj, pp. 94—5; Nasreddin : 護雅夫訳, 147頁; Hikmat Sharif 訳, no. 252 (pp. 171—2)
- 80) cf. K. al-Adhkiyā', pp. 102—3; Juḥā : Farrāj, p. 104
- 81) cf. K. al-Adhkiyā', pp. 117—8; Juḥā : Farrāj, p. 68; Nasreddin : 護雅夫訳, 238～239頁; Hikmat Sharif 訳, no. 193 (p. 116)
- 82) cf. Jam' al-Jawāhir, p. 162; Juḥā : Farrāj, pp. 72—3; Nasreddin : 護雅夫訳, 96～97頁; Hikmat Sharif 訳, no. 24 (pp. 17—8) ; AT 1592 B (p. 459), Mot. J 1531. 3 (vol. IV, p. 122)
- 83) cf. K. al-Adhkiyā', p. 93; Juḥā : Farrāj, p. 97; Nasreddin : 護雅夫訳, 195頁; Hikmat Sharif 訳, no. 93 (pp. 63—5) ; Mot. J 1193. 2 (vol. IV, p. 90)
- 84) Juḥā : Farrāj, pp. 89—90; Nasreddin : 護雅夫訳, 135頁; Hikmat Sharif 訳, no. 394 (pp. 256—7) ; Mot. K 1054 (vol. IV, p. 366); cf. 「裸の泥棒」(字井無愁, 日本の笑話, 角川書店, 昭和52年, 186～187頁)
- 85) 'Abbās Maḥmūd al-'Aqqād, Juḥā, Cairo, 1955, pp. 107—8, 124
- 86) cf. K. at-Taṭfīl wa-Hikāyat at-Tufaylīyīn wa-Akhbār-hum wa-Nawādir Kalām-hum wa-Ash'ār-hum (註27参照) p. 59; Juḥā : Farrāj, p. 78; Nasreddin : 護雅夫訳, 129頁; Hikmat Sharif 訳, no. 257 (pp. 175—6)
- 87) cf. Jam' al-Jawāhir, p. 159; Juḥā : Farrāj, p. 75; Nasreddin : 護雅夫訳, 136～137頁; Hikmat Sharif 訳, no. 23 (p. 17); Mot. J 1392. 1 (vol. IV, p. 110)
- 88) cf. K. Akhbār az-Zirāf wa-l-Mutamajjīnīn, rev. Tāhā 'Abd ar-Ra'ūf Sa'd, Cairo, 1978, p. 30; Juḥā : Farrāj, p. 78; Nasreddin : 護雅夫訳, 50頁; Hikmat Sharif 訳, no. 35 (p. 24); AT 1558 (pp. 449—50), Mot. J 1561. 3 (vol. IV, p. 127)
- 89) cf. Akhbār al-Ḥamqā, p. 142; Juḥā : Farrāj, p. 100; Nasreddin : 護雅夫訳, 52～53頁; Hikmat Sharif 訳, no. 304 (p. 212); cf. AT 1674* (p. 474), Mot. J 2175. 1 (vol. IV, p. 189)
- 90) cf. K. Akhbār az-Zirāf wa-l-Mutamajjīnīn p. 56; Juḥā : Farrāj, pp. 105—6; Nasreddin : 護雅夫訳, 107～108頁; Hikmat Sharif 訳, no. 74 (pp. 49—50); Mot. J 1521. 1 (vol. IV, p. 120)
- 91) 'Ubayd-i-Zakānī (1370年没) の Risāla-i-Dilgushā や, Jāmī (1492年没) の Baharistān にも Juḥā の笑話は登場する。但し, イランでは Nasreddin の方が有名で, Mollā Nasreddin として知られている。
- 92) S. Thompson は「こういった短い笑話は一連の物語群の形をとる傾向があるのは, 滑稽な事件がある人物に結びつくと, その後はその人物の軌道の中にすべての種類の笑話, 適, 不適にかかわらず引き入れられてしまうからである。一人の主人公が抜目のないくらゐで悪名高いかと思うと同じ人物が同時に愚かしい人物の典型として語られることがある。また卑猥な話もこの同じ人物についてまわるといったことがよくあるのである。」と言っている (The Folktale [荒木・石原訳, 民間説話

(上), 33~34頁])。

93) 'Abd al-Hamīd Yūnis, Mu'jam al-Fūklūr, Beirut, 1984, pp. 106—7

94) 山口昌男, 道化の宇宙, 講談社, 昭和60年, 158頁

95) 'A. Yūnis, "Goha : Shakhṣiya 'Ālamiya", al-Funūn ash-Sha'biya, III, Cario, 1969 [Hasan M. El-Shamy, Folktales of Egypt, Chicago, 1980, pp. 219—20]

96) イエーメンでは Ahmad al-Mu'at tari(?)の方が有名らしい。

97) プラトン, アリストテレスを始め, 古来, 笑いに關する言及は多いが, アラブ人も例外ではない。例えば, al-Jahiz は「けちんぼども」の書において, アッラーの御言「笑わすのも泣かすのもこのお方。死なすのも生かすのもこのお方。」(53章43~44節) は笑いが生, 泣きが死に模されているのだと解釈する (ed. Van Vloten, Cairo, 1980, p. 7) が, 笑いのコスモロジカルな意義を考えると興味深い (cf. 山口昌男, 道化の民俗学, 筑摩書房, 昭和60年, 59頁)。その他, al-Kindi (873年没) などの, 笑いに關する言及は F. Rosenthal の前掲書 (註4 参照), pp. 132—8 (On Laughter) を見よ。